

「延暦寺比叡山」

延暦寺は天台宗の総本山であり、京都・滋賀県境にまたがる東西 5 km、南北 8 km の広大な比叡山を境内にしている。開創者は伝教大師最澄（でんぎょうだいし さいちょう）。

延暦寺というのは比叡山全体を指すといわれ、三塔は根本中堂を中心とする東塔（とうどう）、釈迦堂を中心とする西塔（さいとう）、最後に開けた横川（よかわ）の三つをいう。東塔は法要など各種行事の行われる表の場、西塔は修行の場、横川は勉強の場ともいわれる。現在、比叡山では国宝 10 件のほか多数の重要文化財を保有し、一部は国宝殿で展示されている。標高は根本中堂で約 600m、最高峰・大比叡は 848m である。

最澄以後、慈覚大師円仁や智証大師円珍、あるいは慈恵（じえ）大師良源（元三大師）らの名僧を輩出し、平安中期には「南都（奈良）北嶺（比叡山）」と並び称されるほどの威容を誇るようになる。また、さながら総合大学と称すべき教育機能を備えていった。平安末期以降、延暦寺から鎌倉新仏教の祖師、法然・親鸞・栄西・道元・日蓮らが相次いで巣立っていった。信仰に加え教育機関としての機能が充実していたためである。

それにより比叡山は今日、日本仏教の母山と称されている。

延暦寺は、王朝貴族らからの寄進を受けた巨大な荘園領主でもあった。そして、その権益を守るために武装した僧、いわゆる僧兵が現れ、中世には大名並みの武力を擁するようになった。元亀 2 年（1571）に織田信長に敵対する勢力と手を結んだために、信長の焼き討ちに遭い、甚大な損害を被った。しかし、本能寺の変の後、豊臣秀吉、徳川家が相次いで保護を加え、近代に入っても復興への営みが続けられた結果、三塔 十六谷 七十三院 百九坊の旧観を回復するに至った。

平成 6 年（1994）世界文化遺産に登録された。

現在の座主： 257 代 森川 宏映（もりかわ こうえい） 師

『不滅の法灯』

延暦寺東塔の中心となるお堂が根本中堂である。内陣の厨子深く安置された秘仏の前に三つの釣り灯籠がうっすらと明かりを放っている。最澄以来 1200 年守りつがれてきた「不滅の法灯」である。織田信長の焼き討ちにより、いったんは途絶えたが、山形県の立石寺に分灯していた法灯を移し、現在まで連綿として伝えてきた。「油断大敵」という言葉は「不滅の法灯」の菜種油を断やすと大変になることから生まれたという。

『千日回峰』

「回峰行」とは、毎日休むことなく比叡の峰をめぐり歩く修行である。

この回峰行者が歩く道を「行者道」という。回峰行者の白装束のいでたちは、「浄衣（じょうい）」とよばれる。腰には「死出（しで）ひも」と「降魔（こうま）の剣」をつけている。

回峰行は礼拝行である。比叡山に点在する諸堂はもちろん、霊石、霊木、霊水など、あらゆるものに礼拝する。歩く距離は1日およそ30 km。行に入れば、休むことはゆるされない。

鬼神のごとく、山中を飛ぶように歩くという千日回峰行は、荒行中の荒行である。

千日回峰は、7年間かけておこなわれる。その修行形態は

第初百日（1年目） 毎日30キロ

第二百日（2年目） 毎日30キロ

第三百日（3年目） 毎日30キロ

第四百日（4年目） 毎日30キロ

第五百日（4年目） 毎日30キロ

第六百日（5年目） 毎日30キロ

第七百日（5年目） 毎日30キロ 堂入り（9日間断食・断水・不眠・不臥）

第八百日（6年目） 赤山禅院往復 毎日60キロ

第九百日（7年目） 京都大廻り 毎日84キロ

第千日（7年目） 毎日30キロ

回峰の出発は午前2時。所定のお勤めをすませてから出峰する。

七百日を満行すると「阿闍梨」と呼ばれる。

「堂入り」とは、無動寺谷 明王堂で9日間、食と水を断ち、眠らず、横にもならず、ただひたすら『法華経』と真言を唱え、不動明王と同体になろうとする修行である。一日に一度だけ仏に供える水を汲むために、堂外に出る。半ばも過ぎると、死臭が漂い、歩くことさえ困難になる。死をかけての苦行である。九百日を満行して、直ちに最後の一千日に入る。最後の百日は、75日をもって満行となる。残り25日足りないのは、一生をかけての行という意味である。

一千日を満行した行者は「大阿闍梨」と尊称される。

『論湿寒貧』

比叡山には昔から「論湿寒貧」という言葉が伝えられている。論は、日々教学の習得・実践に励む姿をいい、湿と寒は、前に琵琶湖を控えいつも湿気が多く、また冬の寒さは格別であり、貧は、修行者の常として清貧をモットーとすべきことであり、いずれも山上の修行生活の厳しさをよく示している。

以上